

中期経営目標		a 授業力向上									
短期経営目標		仲間とかかわることで自らの考えを深め、学び続ける意欲の醸成につながるよう、「学び合い」の授業の質を高める。									
目標達成のための方策		・主題研究推進委員会において構想された「学び合い」の視点に立った単元・授業のあり方を踏まえ、各部会、各教員による授業実践を行う。	・考えの深まりや学び続ける意欲の醸成につながる「仲間とかかわり」のあり方に重点を置いて授業実践を振り返る。	・南中学校のめざす授業の視点で相互参観、事後協議を行うとともに、授業参観者用シートの記述、教員向け「授業だより」の執筆を通じて授業力を高める。	・教員と生徒がめざすべき「学びの姿」を共有できるように、生徒向けに通信を作成、発行して授業で見られた望ましい姿を周知、還元する。						
成熟度による成果指標		○仲間とかかわりながら自らの考えを深めていくことができる授業				○学び続ける意欲の醸成					
		1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2段階	3段階	4段階		
		仲間とかかわる場面が設定されていない。	仲間とかかわる場面はあるが、考えの発信が一方通行である。	自分と仲間の考えを比べながら、交流している。	かかわりを通じて自分の考えを見直し、深めている。	課題を与えるだけで、自発的に学ぶ技能や姿勢を培う場がない。	課題に取り組む意義や方法が意図的に指導されている。	次の課題に気づき、自ら取り組めるように授業を展開している。	自ら課題を設定し、解決を目指す授業になっている。		
令和2年度までの段階											
○成果指標【評価基準】		○生徒アンケート（アンケート項目 問① 問②） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート（アンケート項目 問① 問②） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○授業参観シート（参観シート観点 問⑤） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】				○生徒アンケート（アンケート項目 問③ 問④） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート（アンケート項目 問③ 問④） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○授業参観シート（参観シート観点 問⑩） 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】					
☆取組指標【評価基準】		☆授業研究全体会や部会別授業研究会における事前事後の部会開催数 【A：年間15回以上、B：年間10回以上】 ☆教育研究論文提出 【A：10本以上、B：9本以下】				☆公開授業に対する職員の参観数 【A：一人平均15本以上、B：一人12本以上】 ☆授業参観シートのA評価の年間平均数 【A：7以上、B：5以上】					
前期の分析・解釈		<b>B</b> 7月までに主題全体授業を2本（英語・道徳）実施した。それを「部会別授業研究会」の「同日同時開催」という形にした。このことで、研究主任一人が奮闘するのではなく、各部長が中心となって指導案検討会や協議会の持ち方、授業のまとめなどの事前事後の部会を計画・開催したり、授業当日の研究協議会を計画・運営したりすることができた。現時点で2部会だけで15回以上の部会を開催している。このことは、次年度の研究発表会を見据え、研究推進委員が本校の目指す授業像や生徒像をより確かなものとして捉えられるだけでなく、研究推進委員が前面に立って当日の発表や協議会を取り回していくことを見据えた貴重な経験を積むことにつながることができた。現時点で7本公開された一人一授業においても、アンケート結果や授業参観シート、実際の単元構想図からも主題の軸である「学びの展開」を意識した授業が着実に増えてきている。				<b>B</b> 現時点で公開された一人一授業において、相互参観者は平均6～7名おり、昨年度より互いに学び合う雰囲気は高まっている。「授業だより、授業メモ」の執筆についても、昨年度は、参観者それぞれの観点で書かれていた傾向があったが、今年度は、執筆者が本校主題をふまえた観点で分析的に見ることができている。このことは、学校として目指す授業像や生徒像をより確かなものになってきたことの表れであり、また、個々が授業者になったときにその観点で授業を構築していくことにもつながっている。また、「授業だより、授業メモ」のどちらも全職員に配付されるので、個々の職員はその内容を読み込み、それぞれが南中の目指す授業像や生徒像について自分なりに解釈して、各自の授業づくりにつなげている。それらのことが、生徒アンケート「仲間とかかわりの良さを実感できている」との8割以上の回答にもつながっている。					
更新策		主題推進委員の役割が明確化したことで、その自覚と責任が生まれてきたので、全体授業や部会別授業だけでなく、一人一授業公開の授業づくりや指導案検討においても、3部会が中心になる推進を強化していきたい。そのためには、担当教科の授業公開日を進捗管理している教務主任と各部長が連携を図り、教務主任が各部長に声をかけて授業公開に向けた授業づくりや指導案検討の進捗管理をしていけるようにしたい。そして経験者が若手の授業づくりをサポートする場や機会を増やし、学校一体となって、学校として目指す授業像や生徒像について話し合う雰囲気を高めていきたい。				授業参観シートの評価は、個々の授業者の経験値もあるのでA評価の獲得は難しいが、今後も各項目を意識して参観し続けることで、授業者になった時にその項目をふまえた授業づくりを生かされることと考える。教師は少しずつ学校として目指す姿を確かなものにしていくが、生徒たちがそれを理解するには至っていない。そこで、生徒対象の「窓」にその旨を込めた執筆を意識することはもちろん、各学級に掲示する際に線を引いたり読んだりして生徒の関心を高めたい。					
後期の分析・解釈		<b>A</b> 9月から12月までに「部会別授業研究会」を3本（保健体育、理科、数学）実施した。この実践に向けて、各部会が指導案検討会を通して、南中が目指す授業について何度も確認し合ったことで、教師アンケートの回答が問い①②において共に9割を超えた。生徒アンケートについては横ばいであったが、このまま教師が意識をもち続け、日頃の授業の質を高め続けていけば、自ずと学習集団の質や個々の取り組む姿勢は高まってくると考える。授業参観シートによる相互評価についても、本校の研究の軸となる「学びの展開」を意識した授業づくりかどうかに関する問いに対して、多くの授業が8割を超えていた。				<b>B</b> 生徒アンケートが前期に引き続きAレベルをキープしているのは、左にも記述したとおり、授業者一人一人が日々の授業において、生徒同士の関わりの場を確保しようと意識しているからだと考える。一方で、教師アンケートの回答が問い③においては減少、④においても伸び悩んでいる。「授業メモ」については、教師が読み手対象として執筆されているので、どの教師も自分の実践と照らし合わせながら興味深く読んでいる。一方で「窓」の活用については、具体的にどのように活用して、生徒と共に南中がめざす望ましい姿を共有していくのか伸び悩んでいるのが実情である。					
次年度の課題・更新策		主題の各部会については、それぞれ部長を中心にして自立して運営がなされるようになってきている。それにより、授業者一人一人が「学びの展開」をふまえた授業づくり、「学び合い」「かかわり」のある授業づくりをしようという意識が高まってはきている。しかし、まだ「活動ありき」でねらいが曖昧な「かかわり」や「グループ活動」も少なからずあった。授業づくりに意識が高まっている分、参観側となったときにもその視点で評価をしていくべきである。かかわり場面が目に見えたらとりあえず高評価というのではなく、それによって自分の考えを再構築したり、心が揺さぶられて主体性が高まったりすることを期待できるものであるかなど、授業の見方の質を高められるように、一つでも多くの公開授業を参観できるような体制を構築する。				南中として目指す生徒の姿が「学び続ける生徒」とあり、言葉としてとても広いものである中で、各教科の「学び続ける姿」がどのような姿なのかについて、生徒の具体的な姿で表現していくことも大切である。このことをふまえて、次年度において「授業メモ」や「窓」を執筆する際には、手立ての有効性を検証する視点だけでなく、南中の研究主題だからこその視点をふまえて執筆できるようにする。「授業メモ」では、学び続けさせようとする手立てはあったか、それは有効にはたらいっていたかを分析していく。「窓」では、生徒は学び続けようとしていたか、それは、どの場面のどんな姿であったか、そして、なぜその姿に価値があるのかなどを意味付け価値付けしていく。こうして、授業作りも参観も参加も「学び続ける」を軸に全面に押し出したい。					

中期経営目標		b 学級経営力の向上										
短期経営目標		「級訓」「学級目標」を明確にし、一人一人の個性を生かしながら、集団としての成長につながる学級経営を行う										
目標達成のための方策	・南中ノートの活用や教育相談などの機会、諸検査の結果を通じて個々の生徒の個性(興味・関心、適性、能力、人間関係等)を的確に把握する。	・個々の生徒の個性を把握した上で、意図的に学級や行事等で役割を分担させ、次につながる肯定的な評価をする。	・応援合戦、合唱コンクールをはじめ、学校生活全般において「級訓」「学級目標」を意識した取組、振り返り、評価、目標の更新を行いながら学級経営を行う。	・「級訓」「学級目標」を意識しながら、より大きな集団と協調できるように、室長会、生徒会の行事・活動において生徒が自分で考え、行動できるように支援する。								
成熟度による成果指標	○一人一人の個性を生かした学級経営				○目標に向かって成長を続ける学級集団の育成							
	1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2段階	3段階	4段階				
	一人一人の個性が学級経営に反映されていない。	一部の生徒の個性が発揮されるように学級経営がなされている。	生徒の個性を把握した上で、意図的な学級経営がなされている。	学級の中で生徒の個性が発揮され、高い有る感、所属意識を感じている。	「級訓」「学級目標」を意識させることがない。	行事等の際に「級訓」「学級目標」を意識させた上で取り組ませている。	学級での諸活動が「級訓」「学級目標」との関連が図られている。	「級訓」「学級目標」に沿った振り返りと目標の更新が行われている。				
令和2年度までの段階												
○成果指標【評価基準】	○生徒アンケート(アンケート項目 問⑦ 問⑧) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】				○生徒アンケート(アンケート項目 問⑤ 問⑥) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】				○教師アンケート(アンケート項目 問⑧ 問⑨) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】			
☆取組指標【評価基準】	☆「教員自己評価シート」において「学級経営」をテーマに挙げている担任自己評価において「4段階」に達している記述が見られる。 【A:10学級以上 B:8学級以上】				☆「仲間づくり」の様子や経過が分かる学級掲示がされている。 【A:15学級以上 B:10学級以上】				☆「学級経営案」に対する担任自己評価において「4段階」に達している記述が見られる。 【A:12学級以上 B:10学級以上】			
前期の分析・解釈	<b>B</b> 昨年度もこの分野においては担任と生徒との意識の差が大きく広がっている。担任は意識して個々の生徒の個性を把握することに努めることはもちろん、その生徒が活躍できる場を意図的に設けることにも日々努めている。しかし、本校の生徒は、仲間の良さを見つれたり認めたりすることは高い割合でできるが、自分の長所や持ち味を生かした行動を心がけている生徒がやや低い。これは、自分の持ち味を理解しているけれど自信がなくて発揮できないという生徒と、そもそも自分の長所について理解していない生徒がいると考える。一部のリーダーが決めたことに対して、一見「協力している」ようで実は「おとなしく従っている」という集団は発展しない。自分の持ち味を理解し、その強みを個々が十分に発揮しあいながら一つの目標に向かう集団をどう育てていくかが課題である。				<b>A</b> 学校アンケートにおいては、教師と生徒との間にそれほど大きな差はなく、生徒会行事や学年室長会企画を通して、教師・生徒ともに自分の学級をよりよくしたいと感じていることは分かる。ただし、それは取組内容が自分の持ち味を発揮したり仲間の良さを認め合ったりできるような、意図的具体的に計画されているからだと考える。また、事前事後のふりかえりの場や方法も施されているので「級訓」や「かかわり」を意識した活動を取り組みやすい。しかし、今後はその活動を通して得られた気づきや振り返りをそのままにせず、いかにしてさらなる学級の質向上のための目標の更新につなげていけるか、そして、日常の学校生活において、そこで得られた新たな目標や具体的な手立てを教師や生徒一人一人が意識して行動につなげていけるかが課題である。							
更新策	教師が日頃から生徒の一人一人の良さを見つけ、褒めて、伸ばして、自信をつけさせていくことに努めることを継続していくしかない。このような自己肯定感、自己有用感を高めていく取り組みや声かけ、働きかけを意図的・計画的に教育活動に位置づけたり、日頃から生活ノートや日常の会話の中で意識して伝えたりしていきたい。生徒にとっても心地よいと感じられる学級は自分らしさを発揮しても受け入れられる温かな学級であり、それが保障されて初めて研究推進の柱にある「学び合い」に欠かせない生徒同士で作り上げる温かな学習集団構築につながっていく。				生徒が行事で望むゴールは表面的・一時的なものになる。そこで、教師は行事のねらいをふまえて、どんな集団にしたいのか、個々の生徒に対してどんな成長をしてほしいのかを明確にもち、彼らのふりかえりに対して、ていねいに意味づけ価値付けをしていきたい。そして、全学級が行っている背面掲示も、単に思い出としての「点」で終わらず、その行事で学級として何を学び、何が課題であったのかをキーワードで残し、生徒がそれを見返したときに「点」と「点」をつなげて級訓や学級目標につながる「線」になるような工夫をしていきたい。							
後期の分析・解釈	<b>A</b> 学校アンケートにおける教師と生徒との意識の差がなくなってきただけでなく、生徒アンケート⑦に関しては微増している。これは、日頃の週案や自己評価シート、学級経営案の振り返りから、前期更新策にも記述した「自己肯定感や自己有用感を高める取組」を職員一人一人がそれぞれの立場で創意工夫しながら実践し続けてきた成果であると考える。また、職員の授業づくりに対する意識が全体的に高まっており、個々の生徒の考えや思いを尊重し、生かす授業が増えつつあることから、日頃の授業の中で生徒一人一人が自信をつけることができる場が自然と保障されてきているのではないかと考える。前期に生徒の実態についても分析したが、自分の持ち味に肯定的な生徒が増えれば、学級づくりや仲間とのかかわりについて一人ひとりが当事者意識をもてるようになり、相互交流も促進するようになると考える。				<b>B</b> 学校アンケートにおける教師と生徒との意識の差に関して前期は差がなかったが、後期は再度開いた。教員アンケートはAレベルに上昇し、生徒アンケートはCレベルに下降した。コロナの関係で学校行事が当初の計画通りに進まず、学期の後半で体育行事大会と南中祭を続けて開催する形となった。生徒会企画や室長会企画が実に工夫されていた内容であったこともあり、生徒たちは楽しく充実した活動を経験することができ、学校全体としても明るく活気を取り戻すいい取り組みとなった。しかし、短期間で内容の多い企画を進めるために一部の生徒が中心となって、学校学年全体を牽引せざるを得ない状況になり、生徒一人一人が「参加する」場面は充実したもの「参画・協働できる」場づくりまで保障できなかったことは否めない。前期更新策でも記述した「その行事で学級として何を学んでいくのか」というねらいを明確にして学級としての臨み方を明確にしないと単なるイベント「点」で終わってしまう事例となったのではと考える。							
次年度の課題・更新策	「自己肯定感や自己有用感を高める取組」について、日々変化していく生徒の実態に合わせて柔軟に臨機応変に対応していくことは、職員全体が少しずつ経験できるようになってきたが、年間を通して意図的計画的に実践し続けられる見通しをもてるようにしていきたい。そのためにも学級経営案や自己評価シートを年度当初に書き、年度末に自己評価しているが、長期休業前や前期終了時に再確認し、週案に自己の振り返りをする場を確保することで、修正案を経営案に朱書きで上書きをしていくなど、自分が掲げた経営方針や手段の見直しや修正を、年間単位から学期単位にスパンを短くして学級の実情に即した細やかな対応を取れるようにしていきたい。それが定着していけば、毎月末の週案の振り返りのテーマを「学級経営案の取組評価」としていく。				コロナ禍における自治的諸活動の企画・運営については、どんなに細やかな計画を立てていたとしても、必ずしも思い通りにならないことはこの2年で多くの職員・生徒が何度も経験してきた。しかし、やはり、学校生活において、生徒たちの個性の伸長や望ましい人間関係構築、そしてそれに対する自主的実践的な態度を育てるための欠かせない機会であることを痛感した。そこで、学校行事を軸にすることはあっても、学校行事任せにしない学年学級経営・生徒会経営をあらためて考え、一部の生徒だけでなく、一人一人の生徒が自分の学級・学年・学校をより楽しく、より豊かにするために、何が必要でどうしたら実現できるのか、自分たちで考え判断し、学級学年を超えて、日頃から互いに協力を呼びかけられるようにする。その軸に生徒会スローガンを据え、具現化のため、学年・学級・委員会が年間を通して活動をし、全校での学校づくりを目指す。							

中期経営目標	c 集団の中で、課題を発見し解決する力をつけさせる指導力の向上							
短期経営目標	「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたってリーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会と場を保障する。							
目標達成のための方策	・生徒の主体性を発揮できるように、ファシリテーターとしての役割を自覚した指導・支援を行う。		・生徒会や室長会の活動に、計画・運営・評価のサイクルを位置づけ、主体性を伸ばす目的を持って計画的、継続的に指導・支援を行う。		・リーダー研修会、室長会、部長会を通してリーダーとしての役割の理解と自覚を持たせ、活動の中で力を発揮できるよう指導・支援する。		・集団の活動におけるフォロワーの意義を意識し、リーダーと協調しながら活動できるように指導・支援する。	
成熟度による成果指標	○生徒主体の室長会、生徒会の活動				○リーダーとフォロワーが協調した活動の展開			
	1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2段階	3段階	4段階
	生徒会役員や室長会の生徒が教師主導の活動に終始している。	生徒会、室長会の生徒が活動の意義を理解し、内容や方法を考えている。	生徒会、室長会の生徒がそれぞれの目標を元に自分たちで活動を企画できる。	生徒会、室長会の生徒が自分たちで企画した活動を全校や学年に働きかけて実施できる。	行事、活動に参加する際に自分の役割を自覚していない。	リーダーが中心となって他の生徒を引っ張っている。	リーダーとフォロワーが自分の役割を自覚して活動している。	リーダーとフォロワーが互いの役割を理解し、協調して活動に取り組んでいる。
令和2年度までの段階								
○成果指標【評価基準】	○生徒アンケート(アンケート項目 問⑩ 問⑪) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート(アンケート項目 問⑫ 問⑬) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】				○生徒アンケート(アンケート項目 問⑨ 問⑩) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート(アンケート項目 問⑫ 問⑬) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】			
☆取組指標【評価基準】	☆生徒会や室長会の生徒が主体的に企画し、活動できる機会がある。 【A:年間7回以上、B:年間5回以上】※生徒会企画・全学年室長会企画の合計数 ☆各委員会が、生徒会スローガンをもとに生徒の考えによる活動をしている。 【A:年間7回以上、B:年間5回以上】※全委員会企画の合計数				☆リーダー研修会の開催数 【A:年間3回以上、B:年間2回以上、C:年間1回以下】 ☆リーダー研修会・現職研修に参加した有志職員数 【A:年間のべ20人以上、B:年間のべ15人以上、C:年間のべ10人以下】			
前期の分析・解釈	<p><b>A</b> 今年度も学年行事を充実させたり日頃の学校生活を見直したりするための室長会が随時行われており、室長を中心に学年を動かすという雰囲気が高い。教師側からの一方的な指導ではなく、生徒自身に考えさせ、行動を促すという意識も定着しつつある。また、その取り組みに対する生徒たちの協力度が高いことや、係や委員会などの任されたことに対する責任感が強いことなどもアンケートから読み取れる。さらに自治力の質向上を目指すために、係や委員会の取り組みについても、教師側からの仕事をこなす当番活動的なものから、生徒自身がどうしたら学級や学校をより豊かにしていけるのかを主体的に考え、行動を促すという場や機会を保障していきたい。</p>				<p><b>B</b> 夏休み期間中に、後期において部活動や生徒会の中心となって活動していく2年生生徒を対象にリーダー研修会を行った。「①チームビルディングやチームワークについて学ぶ(ノウハウの蓄積)」「②チームで達成感をもつ機会や経験を増やす(経験の蓄積)」をねらいとして行った。参加した生徒は望ましい姿や方法論を思い描いていた者も多かったが「気持ち(心)の共有」「自分の価値観が大切に重きをおいた。参加した教員も学級経営や部活動指導につながる多くのことを学んだ。様々なグループワークを通して少人数と大人数でのチームづくりの難しさの違いを経験した。「聞く姿勢をもつ」「勇気をもって話す」「話したら拍手」「否定しない」というルールの確認と意識で生徒たちの安心感は必ず大きくなることを実感したので、その視点を持ち続け、日頃の教育活動の中で生徒をどう支援していくのかを考える習慣をつけていきたい。</p>			
更新策	<p>室長会運営を生かし、教師が係活動や委員会活動は何のためにあるのか、どのような姿が望ましいのかとの観点に立ち、今一度指導方針や組織編成について見直していく必要がある。学校として目指す生徒の姿を考えていくとき、自治活動の望ましい姿についても再考していく。</p> <p>具体的には、委員会活動については、①日頃の学校生活をいかに豊かにしていくのかを話し合い実行していく組織、②当番活動のように日頃の学校生活を円滑に進めるために必要な活動を実行していく組織、そして、③学校行事やボランティア活動のように、ねらいに賛同する者が集まって目的達成のために実行していく組織の3つに分類し、生徒を募っていく。</p> <p>各学級に位置づけられる係活動についても、②類に当たるものがほとんどであるので、各担任が学級経営案に照らし合わせて、①類設置の可能性を再考していく。</p> <p>委員会活動再編については、生徒議会に諮る必要があるため、次年度のスタートに向けて、まずは後期のうちに生徒会担当者と特活担当者として、既存の委員会が①類のように生徒の発想や主体性を尊重した活動内容になっているのかをふりかえる。そして、その展開が難しければ、②類や③類へのシフトチェンジをふまえた生徒募集の仕組みを考え、委員会活動全体の再編をし、生徒の主体性を伸ばしていく場を広げていく。</p>				<p>研修を受けた生徒たちがそれぞれの持ち場で学んだことを自ら意識して発揮していくことが望ましいが、実際はなかなか難しい。そこで、その研修を共に受けた教師が、その生徒が役割を發揮できるようにファシリテーターとなって支援していくように心がけていく。</p> <p>しかし、教師自身も狙い通りに支援することは難しいと思うので、有志の若手教師に対する現職研修の意味も込め、学級集団を指導・支援する立場、そしてファシリテーターとしての役割をもつ担任として、生徒をどう支援し、生かしていけばいいか学ぶ場を以下のように設定する。</p> <p>これまでのリーダー研修は「生徒対象」「宿泊型」であったが、今年度は、「生徒対象(目的別対象別)」「平日複数回型」「教師対象」の研修スタイルに変える。そのことで、年間一度の機会、一部の生徒メンバーから、年間で複数回、その場その時のリーダーを対象に研修を受けることができるようにしていく。さらには、担任が生徒たちに支援している場面を外部指導者に参観してもらい、ファシリテーターとしての望ましい担任像のあり方について学ぶ場を確保していく。</p>			
後期の分析・解釈	<p><b>B</b> コロナウイルスの感染により、様々な行事の持ち方や進め方などについて、その中身や目的、ねらい、質など見直された。これまでのように学校行事に向けた学級経営の方針に力点を注ぐことができない分、安心・安全・そして豊かな人間関係構築のために、日頃の生活のあり方などに観点がいき、担任の関わりや支援が細やかで具体的になり、単発的ではなく継続的なものになってきたことからアンケート結果が上昇したのではないと思う。</p>				<p><b>B</b> 生徒アンケートはほぼ横ばいで、教師アンケートの⑫はやや低下したものの、⑬は倍近くポイントを上げた。「フォロワーの意義を示し、リーダーと協調しながら活動できるように支援」について、室長会は定期的に開催されており、さらには副室長の開催や書記や会計を交えた三役会なども数多く開催するようになってきている。その都度それぞれの立場の役割や使命などをいねいに伝え、役割を果たせるように担当教員が導いている。</p>			
次年度の課題・更新策	<p>コロナ禍における自治的諸活動の企画・運営の難しさについては先述したところであるが、その分、困難な状況に置かれたときの南中職員や生徒たちの柔軟性や創造力、問題解決能力や粘り強さなどを実感することができた。こういう実態があるからこそ、与えられたものだけでなく、自分たちで状況を正しくつかみ、何をしたらよいかを考え、判断し、行動する主体性を育むための具体的な場づくりが有効に働く。そこで、後期の活動実績を何らかの形で全校の場で評価すると共に、この雰囲気を消さぬように、次年度の自治活動の質向上に向けて、生徒会から前期更新策に挙げた①類や③類を推進する方針を打ち出していく。</p>				<p>これらは経験豊富な学年主任が中心となって進めている。学級担任が日頃の学級経営・学級運営の充実を図っていくためのノウハウを学ぶ機会として、給食の時間に行われることの多いこの時間帯に、副担任が給食指導に入り、若手担任をオブザーバーとして、学年主任の進め方や話し方などを直接見て学ぶことができるようにしていきたい。</p>			

中期経営目標	d まちづくりへの協働・貢献							
短期経営目標	まちづくりへの生徒の主体的なかかわりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。							
目標達成のための方策	・まち協をはじめ地域の諸団体が実施する活動を、参加の意義や必要性、関わり方を理解させる情報提供、指導を行う。		・生徒が主体的なかかわりができるように、地域の諸団体と目指す姿を共有する機会や場を設定する。		・教科や総合的な学習、部活動、委員会において、地域とのかかわりを意識させる指導や活動を行う。		・各種通信や会議、南中協力者会議などの場を通じて生徒が地域の一員であることを積極的に情報発信すると共に、地域から生徒への評価を還元する。	
成熟度による成果指標	○生徒が主体性を発揮しながら地域と協働する活動				○地域の一員としての自覚をもった姿			
	1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2段階	3段階	4段階
	地域の諸団体が実施する活動に参加しない。	地域の諸団体が実施する活動に積極的に参加する。	地域の諸団体と一緒に活動を計画、立案し、周りに働きかけて活動する。	地域に必要なことを見だし、地域に働きかけて活動を進める。	地域の一員であることを意識した言動や授業の振り返りが見られない。	地域の一員であることは意識しているが、具体的な行動を考えられていない。	地域の一員であることを意識し、自分できることを考えている。	地域の一員としての意識を強く持ち、地域に貢献することに意義を見いだしている。
令和2年度までの段階								
○成果指標【評価基準】	○生徒アンケート(アンケート項目 問⑬ 問⑭) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート(アンケート項目 問⑭ 問⑮) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】				○生徒アンケート(アンケート項目 問⑮) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】 ○教師アンケート(アンケート項目 問⑯) 【上位2項目の回答割合 80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 59%以下…D】			
☆取組指標【評価基準】	☆地域行事へ参加する生徒数 【A:300人以上 B:200人以上】				☆地域とのかかわりを意識させる指導や活動を教育活動に位置づけている。 【A:年2回以上、B:年1回】(週案や各種通信より)			
前期の分析・解釈	<p><b>D</b> 学校アンケートにおいてこの分野に対する教師の回答割合が唯一5割を低下している。まちづくりや地域協働に関する活動が教育課程の外にあるので、どうしても守備範囲外という思いがあつて主体的にかかわっていく意識向上が難しい。さらに、年間に位置づけられていた地域の諸団体が実施する活動もコロナ感染拡大防止のために次々と中止となつて、ますます地域とのかかわりを実感させることが難しくなつてきている。ただし、そういう厳しい状況の中でも、諸団体の温かい支援のおかげで、リーダー研修会を始めとする生徒たちの豊かな活動を展開することができているので、その旨を何らかの形で諸団体に報告したり、できれば還元したりしていきたい。</p>				<p><b>D</b> 新型コロナウイルスが蔓延している状況において、地域の諸団体が実施する活動への参加は難しい状況にあることから、この分野における学校アンケートにおける生徒の回答割合が唯一5割を割っている。しかし、取り組みの実際については、総合的な学習の時間において、1年生は職業セミナー、3年生は高浜市制への提案など、地域とのかかわりや地域への関心を高める学習は確実に展開している。生徒たち自身も真面目に学習活動や調べ活動に取り組んでいる。しかし「まちづくりの一員としての自覚」を持たせるには、やはりインプットだけでなく、それをいかにアウトプットさせていき、そこで「一員としての『実感』」をさせていくことが「自覚」につながっていくと考える。そのためにはそこまで想定した単元構想を構築することが必要である。</p>			
更新策	<p>新型コロナウイルスが蔓延している状況において、生徒が地域貢献活動により多く参加することは現実には難しいが、それでも地域諸団体の温かい支援のおかげで生徒たちの豊かな活動を展開できているので、可能な限り支援団体をその活動に招待して参観いただいたり、難しければ学校だより等を通じて感謝の旨を生徒はもちろん、地域や保護者に報告したりしていきたい。そして、こういう状況の中における学校と地域との協働について、情報交換を密にしていきたい。</p>				<p>新型コロナウイルスが蔓延している状況であるが「南中学校協力者交流会」を開催したり、地域の諸団体が主催する定例会などに参加したりする中で、こういう状況だからこそ求められる協働のあり方や活動の可能性を話し合っていく。そして、それらを相互的な学習の時間や生徒会活動、室長会企画等と連動させて、生徒が「まちづくりの一員」としての実感を得られる場面としてのボランティア活動や体験活動、広報活動などに展開させることも視野に入れていきたい。</p>			
後期の分析・解釈	<p><b>C</b> 後期においても新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、地域の諸団体が主催する事業は開催されず、地域の各諸団体とのかかわりや協働する機会を得ることができなかった。しかし、生徒アンケートのこの分野に関する全ての回答は微増している。このことは、総合的な学習の時間での地域学習や職業セミナー、社会科における市政に関する学習等において、生徒一人一人が真摯に、主体的に取り組んでいるからこそ、地域の一員であることを少しずつ自覚し、まちづくりを自分事として考えられる取り組みができているのではないかと考える。また、リーダー研修会や支援者交流会、高浜市文化協会作品入れ替えなどの取り組みを通して、地域の方々から校内に足を運んでくださる機会を設け、職員に目に見える形で意識づけたことが、生徒への意識付け・働きかけを高める要因につながっていったのかとも考える。</p>				<p><b>D</b> 学校アンケートにおいて、「地域とのかかわりを意識させる指導や活動を教育課程に位置づけている。」の教師の回答割合が、前期の79%から後期は32%に半減した。よって、この分野における全ての問いに対して教師の回答割合は5割以下となった。このことは、前期にも書いたが職員は丁寧に学習や教育活動を丁寧に実践しており、その結果、生徒はアンケートにおいて「自分はまちづくりの一員としての自覚をもち、地域活動に主体的に関わりたいと思っている。」の問いに、前期の49%から後期は63%に増加している。生徒一人一人は地域の一員であることを少しずつ自覚しているが、職員自身は学習のねらいを達成させてはいるが、さらにその先にある「学校づくり」のねらいをまだとらえていないのではないかとということがわかる。</p>			
次年度の課題・更新策	<p>次年度も、新型コロナウイルスの状況によって地域活動の実施がどうなるか見通しが立たない。そこで、学校と地域、生徒と地域のかかわり方について、どのような状況になつても「地域貢献」へのスタイルの確立を見いだしていきたい。特に、このところ実施ができずにいる「街路樹ボランティア」について、生徒において「ボランティア活動とは街路樹ボランティアである」というイメージが強いので、生徒会や委員会、室長会を中心として、ボランティア活動の意義を再確認し、どのようにしたら生徒たちがボランティア活動を自分事として捉えるようになるのか話し合える場を設けたい。同時に、新型コロナウイルスの状況に左右されず、日頃から地域との情報交換を密にし続けていくとともに、いつでも生徒が地域貢献活動に参加できるように、生徒の地域における新たな学びの場や可能性を模索したり、各地域から求められる学校や生徒に対する姿や使命に応えたりし続けようとする機運を高めていきたい。</p>				<p>上記にもあるように、生徒のアンケート結果から、どの職員も本校の目指す生徒像の一つである「地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める生徒」の育成にしっかり寄り添っている。そこで、職員会などを通じて、本校の目指す生徒像を共有したり、どの職員も「地域とのかかわりを意識させる指導や活動を教育課程に位置づけている」ということを共通理解していく場を繰り返し保障することで、その定着と意識化を図りたい。さらには、地域を対象に取り組んでいる「各種通信や会議、南中協力者会議などの場を通じた、生徒が地域の一員であることの積極的な情報発信」を機会に応じて職員にも行うことで、学校として目指す姿を共有していきたい。</p>			

中期経営目標	特別な支援を要する生徒・不登校生徒に対する指導体制の充実				多忙化解消の推進			
短期経営目標	指導組織の確立と実効性のある運用				在校時間の縮減に向けて業務の見直しの推進			
目標達成のための方策	・みなみ教室、日本語指導教室、通級教室の目的を明確にし、主担当者を中心に据えた指導組織を構築する。		・みなみ教室、日本語指導教室、通級教室での指導に全教職員がかかわり、学年、担任との情報共有を図りながら、個に応じた指導を進める。		業務改善推進委員会、管理職の双方から在校時間の縮減に向けた具体的な方策を示し、実行する。		多忙化の解消の必要性を周知し、ライフアンドワークバランスの意義を理解できるよう、職員会などの場を通じて研修を行う。	
成熟度による成果指標	○特別な支援を要する生徒・不登校生徒の満足度				○在校時間の縮減			
	1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2段階	3段階	4段階
	各教室を利用する生徒の満足度が低い。	利用する生徒の満足度に教室毎にばらつきがある。	各教室を利用する生徒の満足度が高い。	利用生徒の満足度が高く、教室復帰や日本語力、ソーシャルスキルの向上が認められ、次の段階へ進んでいる。	在校時間の縮減に向けて意識を持って業務の見直しを行っていない。	在校時間の縮減に向けて意識を持って業務の見直しを行っているが、縮減にはなっていない。	在校時間の縮減に向けて意識を持って業務の見直しを行い、縮減につながっている。	在校時間の縮減に向けて意識を持ち、業務の見直しと削減を行い、かつ成果も実感できている。
令和2年度までの段階								
○成果指標【評価基準】	○教師アンケート(アンケート項目 問⑰ 問⑱) 【上位2項目の回答割合 80%以上・・・A 70%以上・・・B 60%以上・・・C 59%以下・・・D】				○教師アンケート(アンケート項目 問⑲ 問⑳) 【上位2項目の回答割合 80%以上・・・A 70%以上・・・B 60%以上・・・C 59%以下・・・D】			
☆取組指標【評価基準】	☆各教室担当者と利用生徒担任との間で利用の様子や今後の支援方針の連携ができている。 【A:十分できている、B:おおよそできている】 (週案の記述や面談より)				☆在校時間の縮減に向けた具体的な方策の提案数 【A:5つ以上、B:3つ以上】 ☆在校時間前後期の平均数【A 45時間以内、B 55時間以内、C 65時間以内、D 75時間以上】			
前期の分析・解釈	<p><b>A</b> これらの生徒に対しては、昨年度から担当者が継続して担当していることもあり、各担当が主体的にコーディネートして、部会で対応と対策を話し合ったり、直接担任と情報共有を重ねたりできている。職員アンケートからも、担当者が担任と共に家庭訪問、保護者相談を密に行い、本人・保護者との関係を築きながら登校に向けた働きかけを行っていることもわかる。通級担当者も三者懇談会に同席したり、日本語担当者が外国籍生徒と給食を会食したりと、本人や保護者が少しでも安心して学校生活を過ごすことができるような働きかけをすることができている。年々、個々の生徒が抱える問題は多岐にわたっているが、担当教員のきめ細やかな指導・支援により、脱引きこもりや教室復帰、安心した学校生活に向けて着実に前進している様子が見えてくる。</p>				<p><b>C</b> 4月から7月までの平均時間外勤務時間は65時間前後を推移しており、昨年度に比べてかなり縮減することができている。しかし、月45時間というラインにはまだまだ及んでいない。そこで、定期テストによって授業がない日や夏季休業の最後の1週間において、年休を積極的に取得できるような体制を整えたことで、昨年度に比べて年休取得率が高まることを期待できる。あとは、月80時間以上の職員が毎月15人程度、100時間以上の職員もいまだ7~8人おり、業務が集中している職員にほぼ固定していることから、該当職員を対象とした業務の分散や業務の見直しについてさらなる方策を考察していきたい。</p>			
更新策	<p>学校不適應の原因が多様化したり、LGBTやヤングケアラーなど、これまで経験したことのない分野も本校にも出始めてきており、より専門的な知見が求められている。個々に応じた適切な対応ができるように研修を充実させる必要がある。外国籍生徒も年々増加してきているので、通訳が必要な生徒は、ますます支援が必要である。今後も、ポルトガル語対応のスクールサポーターを有効活用したり、通訳支援を受けながら指導にあたるようにしていく。</p>				<p>主題推進担当職員や生徒会担当職員、そして若手教員において、在校時間が長い傾向にあるので、打合せや会議については、空き時間を工夫した時程内に位置づけたり、見直しをもって早めにレジュメを準備して関係者に事前に目を通してもらったりするなど、意識をもたせていく。それを具現化していくためには、時間管理や進捗管理をしていく存在が必要である。そこで、主題関係については教務主任が、生徒会関係は指導部会長である教頭が、若手教員については学年主任が、見直しをもたせて早めに準備に取りかかることができるように声かけをしていく。また、部活動のない月曜日木曜日木曜日に少しでも早く帰ったり1時間の年休を取得したりできるように「各個人で毎月1回以上の早帰りの日」を設定しやすくできるように、教務主任と連携して会議や委員会活動の持ち方を見直ししていく。</p>			
後期の分析・解釈	<p><b>A</b> 教師アンケートの問18の回答割合が52%から85%へと大きく上がった。本校の適応指導教室・日本語指導教室・通級指導教室は、それぞれの担当者が2~3年間継続し、経験を積み重ねていることから、各教室の経営方針検討や環境整備だけで精一杯だった1年目に比べて、一番大切にしていかなければならない生徒理解や支援方針、そして関係職員とのこまめなかかわりがしっかりできていることが分かる。さらには、担当者だけでなく、該当生徒を抱える各担任が連携できていると回答していることがとても大きい。また、各教室との連携によって、担任、生徒、その保護者の困り感が軽減しているという事例が不登校対策委員会で度々報告がある。こういう成果が出ていることから、担任が各教室の働き・役割が価値あるもの信頼できるものとの認識を高めているのではないかと考える。</p>				<p><b>C</b> 8月から12月までの平均在校時間が4月から7月までと比べて、80時間以上と100時間以上の対象者が共に半減、45時間以上3分の2に減少、その分45時間以内が増加しているという結果となり、前期に比べてかなり縮小することができている。これは、定期テスト当日の計画年休取得推進や、会議や部活動指導のない月木における早帰り・年休取得推進キャンペーンなどの具体的な取り組みを示し、さらにはその達成率を毎月算出し、職員会で全職員に報告・喚起し続けてきた成果であると考えられる。繰り返し喚起し続けることで「早く帰ってもいいんだ」から「早く帰ることができるように努める」という意識を高めている。学年によっては、学年内で時間割を工夫することで、さらに休みを取りやすくしたり連休になるようにしたりしている動きも出ている。</p>			
次年度の課題・更新策	<p>好転している背景が担当者の経験によるものだと言うことも大きくある反面、そのままずっと専任にしたままというわけにもいかない。現在の担当者の経験やノウハウを組織の中にしっかり継承していくという狙いも込めて、担当者が職員として配属されている間に後継を育てていかなければならない。そのためには、複数の職員によって運営している適応指導教室や日本語指導教室は職員の組み合わせを配慮していけるが、通級指導教室は一人で運営しているので、特別支援コーディネーターが副担当者となったり通級指導教室にスクールサポーターを配置したりして、担当者替えによるゼロからの関係づくりで困る生徒にとって年度替わりの渋りを防止していきたい。</p>				<p>次年度も単なる呼びかけだけで終わらずに、目に見える形の取り組みを実行していく。①定期テスト当日の計画年休取得推進、②会議や部活動のない月木における早帰り・年休取得推進、③④の達成率を職員会で報告、④夏季休業中における南中版の無行事期間設置、⑤南中ノートへの朱書きを毎日から週1日への軽減(ただし生徒指導上の観点から生徒のSOS早期発見機会を保障するために、生徒が人目を気にせず必要などときに必要な回数担任に提出しやすくするように、学級として提出日を決めず、個々で週1回の提出日を決めたり、必要などときには毎日提出する学充ノートに悩みを書いて相談したりしてもよいことを伝える)、⑥保護者配付文書のすぐる配信による印刷業務軽減、⑦自動採点ソフトの導入、⑧副担任による担任業務代行 など</p>			